



TITLE:

フランスにおける機械打ち壊し

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. フランスにおける機械打ち壊し. 経済論叢 1957, 80(4): 451-468

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132570>

RIGHT:

經濟論叢

第八十卷 第四號

神戸正雄博士
八十歳祝賀
記念論文集

昭和三十二年十月

京都大學經濟學會

フランスにおける機械打ち壊し

穂 積 文 雄

“Quand vos métiers fileront en un jour plus de fil que nous ne saurions en filer dans un mois, que ferez-vous de nous ? nous donnerez-vous du pain ?”

機械は生産における労働の量をはなはだしくセーブする。したがって、失業や低賃金を結果する。機械は生産労働における熟練をいちじるしく無用化する。そのことは労働の供給を増大し、したがって、労働者を圧迫し、低賃金を招来する。しかも、女子、小児の労働がその傾向に拍車を加える。かくて、機械が出現するとき、すくなくとも、労働者は、これをもって、パンを奪うものとし、これをおそれ、これをのろう。かくて、産業革命は機械打ち壊し事件でいろどられる。イギリスでは、飛梭(fly-shuttle)を発明したケイ(John Kay, b. 1704—d. after 1764)が織工に家を壊わされ、僧形に変装して身をもって逃れ、フランスにおいて陋巷に窮死した。その名もやさしいジエニー紡績機(spinning-jenny)の発明者ハーグリーブス(James Hargreaves, d. probably 1778)もその機械を打ち壊わされて故郷から逃げ出さねばならなかった。水力機(water frame)の発明家アークライト(Richard Arkwright, 1732-1792)の工場は暴徒の襲撃を受け、その機械を破壊され、家財一切、焼きはらわれた。力織機(power-loom)を発明してブレーズ新僧正と謳われたカートライト(Dr. Edmund Cartwright 1743-1823)と協

定してその機械四〇〇台を設備したグリムショー(Grimshaw)は「ブリーズ僧正めが、うまい話で自分を誘惑する前に焼けていってくれたらよかった」とかこたねばならなかった。そして、一八一一年一二年にはラッド王(King Ludd)の名の下にイングランドの中部北部に猛威を擅まましたいわゆるラディツ(Luddites)の機械打ち壊し運動が荒れ狂うを見た。ドイツでも、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832)は、はやく「ウイルヘルム・マイステルの遍歴時代」(Wilhelm Meisters Wanderjahre)の中において「善良なる美人」(Die Gute = Schöne)をして、労働者の機械に対する恐怖を述べさせており、一八四四年シュンジエンのオイレンドビルゲ(Eu-lengebirge)にあげる機械打ち壊しは、ハイネ(Heinrich Heine 1797-1856)の詩「シモン・ジエンの織工」(Die schlesischen Weber)や、ハントマン(Gernhart Hauptmann 1862-1946)の戯曲「織工」(Die Weber)によってもまねく人の知るところである。それでは、それはフランスではいかにあったであろうか。すこしく涉獵してみよう。機械打ち壊しをいうとき、フランス人はよく、パパンのことにふれる。そこでまづ、かれについてうかがうてみる。

パパン(Denis Papin)は一六四七年ブロア(Blois)に生まれた。父は医を業とし、新教を奉じた。パパンもパリンで医学と物理学を修め、その師(Huyghens)の知遇を得た。一六七一年イギリスに滞在、ある実験によって、認められ、化学者ボイル(Boyle)と結ばれた。一六八一年正熱理論(théorie du digesteur)を発表した。それは、パパン式煮沸器(marmite de Papin)として知られてゐる。サントの勅令(Édit Nantes)の廃止により、かれはフランスを去るの餘儀なきにいたった。かれは、まず、イギリスに渡り、ついで、一六八七年マールブルク(Marbourg)の数学の講座を担当したが、さらに、マールブルクを去ってカッセル(Cassel)にいたり、ここで、数々の著名な

機械をつくった。この当時から草した「回想」(memoires)の中に「新水揚げ機について」(Description et Usage de la nouvelle machine à élever l'eau, 1687)がある。これはピストンの交互作用(Le jeu alternatif d'un piston)による機関に関するかれの未完成理論とみられている。この機械は後一七〇七年にかれの記するところによれば、一の気圧機械(Le type des machines atmosphériques)で、内部でピストンの動く垂直のシリンドラーの底部に水を入れ、その水を熱する、蒸気の張力はすぐ気圧と同じになる、ピストンは、一本の綱と二箇の滑車によって軸に連結する盤に支持された重しに引かれて、上昇する、ピストンがその行程の上部に達すると火を取り去る、蒸気は凝結する、ピストンは降下し、盤に支持された重しを引く。パパンがこの実験をこころみたのは一六九八年ころのことである。だが、その結果を発表したのは一七〇七年であった。しかるに一七〇五年、すでにセザリ(Savery)とニューコメン(Newcomen)が、かれらの最初の蒸気機械を確立していた。だが、かれは書簡をのこしている。それが、かれが先であったことを、保障する。パパンは故障を回避するため、かれの機械に安全弁(La soupape de sûreté)をとりつけた。それは、かれの名をもってよばれている。一七〇七年、かれはカッセルで最初の蒸気船(Le bateau à vapeur)を建造し、フルダ河(La Fulda)で試運転した。この蒸気船は外輪船(un bateau à roue actionné par la vapeur)であった。しかるに、ハノーバー(Hanovre)のムンデン(Munden)地方の船乗りたち(les bateliers)は、しぶんたちの特権に執着し、かれの船を打ち壊した。パパンは餘生を失意の中に送らねばならなかった。かれはロンドンにわたり王立協会(La Société royale)の一筆生(humble copiste)として過じ、一七一四年マールブルク(Hesse-Cassel)で死んだ。そぞろにケーの運命を連想せしめられるのは、ひとり、わたくしの感傷のせいのみであらうか。しかし、わたくしの感傷は一八五九年かれの像がかれの生地プロアに建てられ、さらに

一八八七年、パリの工芸学校 (Conservatoire des arts et métiers) にも建てられるをみるにおよんで、いささかなどむをおぼえる。

フランス人がよく引くからというのでババンの蒸気船の打ち壊し事件を、ながめたのであるが、かんがえてみれば、ババンこそフランス人であるが、打ち壊しをしたのはドイツ人である。だから、これはむしろ、ドイツにおける機械打ち壊し事件というべきであろう。わたくしは道草を食ったかたちである。それも、大部分ラルース (Larousse de *xxe* Siècle) によっている。いささか、駄足のきらいなしとしない。わたくしは焦点を、もっと、主題のフランス固有の機械打ち壊しにしほることしよう。そうするとき、まずあげらるべきはジャッカル¹¹⁾のそれであろう。「それは、ほとんど古典的な事例となった」(C'est presque devenu un exemple classique)といわれるくらいだからである。

ジャッカル (Joseph-Marie Jacquard) は、一七五二年リヨン (Lyon) に生まれた。一七九三年軍隊に入り、従軍した。リヨンに帰還の後一七九〇年にいだいた機械製作の素志を再びとりあげた。¹²⁾その機械というのは模様織機のことであろう。それまでのものは大変複雑で、ペダル (marche) から独立して、多数のたて糸の群 (des groupes de fils de la chaîne) の継続的な昇降を調節する cordes semples によらねばならず、梭を司どる織工 (tisserand) の側には一人乃至数人の婦人が、織機の下に身を屈して、織工の仕事につれて、その都度、注意ぶかく cordes をうごかして、織機の一部 (les lames de lisses) をもち上げねばならなかった。この婦人は、*"tireuses de lacs"* (紐引き女) とよばれた。かの女らの労働は骨が折れるものであった。それは織布の速度のさまたげとなった。それに、布の加工が増せば、それに応じて *semples* が増すので、図案家 (*dessinateur*) の企画が制約を受

けた。¹³⁾

この機械に対する改良は、これまでも行われている。ブーシヨン (Basile Bouchon) フォルコン (Falcon) ヴォーカンソン (Vaucanson) ヴェルヂェー (Verzier) が十八世紀にそれに身を入れたものである。

ブーシヨンは一七二五年、小鉤かぎの附いた針 (les aiguilles à crochets) と鉤 (la griffe) を考案し、carton を使用した。織工は、横糸 (dûte) 毎に、それを手で操縦した。フォルコンは、一七二八年、針の数だけの孔を穿った (percé d'autant de trous que l'armure comprenait d'aiguilles) 四角柱 (prisme quadrangulaire) の上に carton をおいた。ヴォーカンソンは孔を穿ち齒車のついたタンブル (tambour) を発明した。この齒車が、翻り板の一打ち毎に (à chaque coup de battant) 齒で自動的にタンブルを廻転させる仕かけである。しかし、かれは carton は使用しなかつた。¹⁴⁾

ジャッカルはこれら先人の跡をたどった。はじめ、かれはヴェルヂェーから啓示を受け、八箇のペダルのついた機械 (un métier à huit marches) を一八〇一年の博覧会 (Exposition) に出品して銅牌を獲得した。その後しばらくして、製絲機 (une machine à fabriquer les filets) を発明した。それは不完全なものではあったが、それによってかれは奨励協会 (la Société encouragement) や大臣のカルノー (le ministre Carnot) の注目するところとなった。カルノーはかれをバリによびよせた。かれは工芸学校に身を落ちつけた。そこで、かれはオヴーカンソンの考案した機械のモデルが、その一隅で塵に埋もれて忘れられてゐるのを見た。かれはそれを研究した。そして、天才的技術家が、よつてもつて装置 (les armatures des lisses) を動かす考をもつたところの、孔を穿つたタンブルから糸を引くことができる部分を理解した。ここにおいて、かれはヴェルヂェーをすて、ヴォーカン

ソンの機構とファルコンの carton を結合することによって、紐を引く人間の労働に代わるにペダルによる自動的運動をもつてする機械の製作に精進した。¹⁴⁾

あるひはいう。かれがパリにいたころ、たまたま官営工場でジョセフィン(Empress Josephine)の豪華なショールを織っていた、しかるに、その製法は煩雜高価であつた、それをみたかれはヴォーカンソンの機械を利用すれば、はるかに簡易安価な製法が可能であることに想到した、そして、ヴォーカンソンの機械において意に満たぬところをファルコンの発明によつて克服せんとしたものである、と。¹⁵⁾

それはともかく、かれは、やがて、リヨンにかへり、かれの最初の機械を組立てた。かれの機械が、いかに、骨の折れる労働を除いたかは、同時代の人のコスタツ(Costas)の言がこれをあきらかにするであろう。曰く「従前の機械は……動かすのに数人の人手を要し、わかい女性がこれにあたつたものである。これらの女性の労働者は triennes de lacs の名でよばれた。かの女等は、終日、不自然な姿勢をつづけることをよぎなくされた。そのため、その四肢は變形し、その生命は短縮された。かくて、作業の手段(Les moyens d'exécution)を改良して労働者(La population ouvrière)を、はなはだあわれな結果をもたらす労働から解放したのは、この天才的な技術家のおかげである」。

しかしながら、技術は絶えず進歩する。一日もとどまらぬ。ジャッカル機もその例にもれなかつた。今日のそれはジャッカルをつくつたままのものではない。ブルトン(Breton)やジャイエ(Jaillet)をはじめ、シュヴァリエ(Chevrier)、シユヴァリエ(Chevalier)、オーベエ(Auber)およびモイソン(Moisson)によつて改良が加えられた。¹⁷⁾しかし、それは、今日でも、かれの名をそのままジャッカルとよばれている。そしてそれは当

然であらう。なぜなら、今日でもそれは原理においてはジャッカル機の発明とことなるところはないのであるから。それで、われわれは今日のジャッカル機の生誕をみることによって、ジャッカル機の発明をしのぶことができよう。今日のジャッカル機の生誕は、つぎの叙述が、眼にみるのもおもいあらしむるであらう。

このような織機の動いているのを見ると、たいていの人は織機にはんと思考力があるとおもうであらう。織機は布地に美しい模様を織り出している。そして、ことなつた梭を必要に応じて選択している。織機はある時はその一方の側面にあるドロップ・ボックスから一つの梭を摘出する。また、他の時には、反対の側面のボックスから別の梭を摘出する。人は織機のもつ記憶に驚嘆する。けだし、織機は一つの色を数分とは使用しないで、急がしく、織りつづけながら、その梭をどちらの側のボックスに入れたかを忘れないからである。時として、織機がドロップ・ボックスにおく余地のない特別の色をもちこもうとする場合が生じる。ドロップ・ボックスはわずか六箇ぐらいしかないのに、織る模様は時々ある色を変えることを要するであらう。それを織姫に委かすは適當でなからう。なぜと云つて、とりかへをせねばならぬ瞬間に織機をとらへることは、かの女にはほとんど不可能であらうからである。たとい、かの女の記憶はそうするに足るとしても。しかし、われわれは、織機にたよることができる。

われわれは、これらの織機の一つが梭を取りかへ引きかへ、着実に動いているのをみてると仮定する。突然、なんらの原因もみえぬに織機がとまる。無地織機で得た知識から、われわれはよこいと (weft) が切れたにちがいないとおもう。しかし、そうではない。それはあきらかである。なぜなら、織姫は、すぐに、特別の梭の一つをとり出して、これまで織機にあった梭の一つととりかへるからである。もしあなたが、かの女に、どの梭をとりかえねばならないか、そして、かの女のそばにあるいろいろの色の色の中からどの色が要るかが、どうしてわかるか、とたずねれば、かの女は、織機の前に綱でぶら下げられている色糸 (coloured yarn) のたくさんの小片を指すであらう。すると、あなたは、必要な色が綱によって数インチだけ引き

上げられているのと、それからまた、同時に、それを入れるべきボックスのナンバーが指示せられているのを、みるであらう。織姫は間髪をいれず、織機がかの女に告げたことを行う。

われわれが特別の梭がいく度かとりかえられるのをみた後、われわれは、また織機のとまるのをみる。今度は織機の電鈴が鳴る。それは一人の男子の注意を喚起する。その男子は織姫の手助けに来る。そして、織機の上方で機械を通過してしまつた一組のカードをとりかへる。男子がカードのとりかへをしている間に、織姫は、かの女が模様入りのカーテンを織っていること、それから、かの女はダドー (dado) すなわち下の縁を完了したこと、それから、デザインがここでよいとの部分に変化し、そしてその部分は別の組のカードになることを説明する。織姫やカードをとりかえる人 (cardshifter) に、とりかえをせねばならぬときを、つけたものが、機械自体であつたことに、見字する人が氣のついていたことはいうまでもない。¹⁸⁾

しかしながら、これほどの発明も労働者からみれば、労働を省き、したがって、かれらからパンをうばう、にくいものにはかならなかつた。リヨンの絹織工たち (les canuts) は、これに対して大きな不満をいだいた。かれらは、しばしば相集つて、ジャッカルはかれらの妻からパンをうばおうとするものである、(Jacquard voulait ôter le pain à leurs femmes.) と主張した。労資協定会審査委員たち (les prud'hommes) まてこれに加担し、ついに機械を広場 (place publique) で破壊せしめた。¹⁹⁾ 委員の一人は後年往時を追想して、「わが生涯の最良の日は、この善行をした日である」(Le plus beau jour de ma vie a été celui où j'ai fait cette belle action.) といつたこと²⁰⁾ づたえられている。また労資協定会 (le Conseil) は、ジャッカル²¹⁾ の発明に関するあらゆるものを消滅せしめんとした。そのため、かれの住居を焼却することを命じさせた。かくて、ジャッカルはその身辺の危険さ²²⁾ であつた。しかし、逃避は、しなかつたらしい。²¹⁾ われわれはさきに、パパンの運命がケイのそれに似たるものある

をみたが、いま、また、ジャッカールの運命がハーグリーブスのそれに似たものあるをおぼえざるを得ない。しかし、かれの発明はやがて普及した。一八〇七年、リヨン市はジャッカールに終身年金三、〇〇〇フランの授与を決議した。²⁴⁾そして、かつて、かれの機械が打ち壊された場所に、かれの銅像が建てられているのを見ることが出来る。²⁵⁾

ところで、われわれは、さきに、ジャッカールの発明が先人、なかんづく、ファルコンとヴォーカンソンのそれに負うところ大なるものあるをみた。ところが、このヴォーカンソンが、やはり、これまた、おなじく、機械打ち壊し史上に、被害者として登場する資格の所有者なのであるからおもしろい。

ヴォーカンソンは一七〇九年グルノーブル(Grenoble)に生まれた。機械については、かれは幼にして穎悟、また、ほんの子供のころ、時計をみて、それにふれないで、その構造を察知し、自分でこれをつくり、それが正確に時間を指示したとつたえられている。リヨンでは、かれは、市に水を引くために水圧機(une machine hydraulique)を考案した。一七三五年パリに行き、解剖学・音楽・機械学を研究した。そして、一七三八年、かれは科学院(Academie sciences)に笛吹き人形(Joueur de flûte)を呈出し、太鼓をたたき、ガルーペを吹く人形・将棋指し人形および自動あひる(Joueur de tambourin et de galoubet, du Joueur d'échecs et du Canard harbotant)が、すぐこれにつづいた。さらに、マルモンテル(Marmontel)の「クレオパトラ」の上演のために、エジプトの女王の胸の上に、気音をたててとびかかる毒蛇をも製作した。一七四一年、かれは絹織物工場の監督官(Inspecteur des manufactures de soie)を拝命、絹織物工業で使用される機械を改良した。²⁶⁾この改良のことはすでにみたところであるから、あらためて述べることをさける。ここで問題は、これがリヨンの労働者(les canuts)からいか

に受け入れられたかにある。かれらは、一七四四年、一揆をおこし、ヴォーカンソンは織機の改良によってかれらを零落させた (les avoir ruinés) と非難した。²⁷⁾ かれらはつぎの歌をうたってかれをおびやかした。

1.

(かりの訳)

Un certain Vecanson,

ヴォーカンソンとかいう

Grand garçon,

やろうが、

A reçu une patte

といやなかまに

De les mères marchants;

ビントをくらった

Gara, gara la gratia

きをつけろやい、やつつけてしまうぞ

S'y tombe entre nos mains.

もしも、きやあつめが、おれたちのところへくるなら

2.

二、

Y fait chia los canards,

キャナルに、くそかけられろ

Lou canards,

キャナルに

Y fait chia los canards,

キャナルに、くそかけられろ

Et la marionetta.

そしてまた、あやつりにんぎように

Lo plaisant Jequinet,

おひとよしのジョキネが

Si sort ses braves, velta

もしもでてくれれば

Qu'on me le cope net.²⁸⁾

やつつけてやるぞ

そして、かれらは、かれを、ひどいめにあわしたことだろう。もし、かれが、逃げなかったら。かれは僧形に身

をやつして、わづかにのがれることができた。³⁰⁾

さらに文献をあさってみる。すると、まだまだ、この種の事件が出てくる。たとえば、一七八九年、レヴェイヨン (Revelion) が壁紙 (papier peints) を製造する機械を發明した。かれのフル・ネームや生年月はラールズにもあきらかにせられていないが、かれはルイ十六世の恩寵を蒙り、その製造所は宮廷工場 (manufacture royale) とせられた。しかし、それにもかかわらず、四面楚歌、かれの製造所は楚人の一炬ならぬ暴民の手により烏有に歸した。³¹⁾ それは一七八九年四月二十八日のことである。³²⁾ また、インゴールド (Pierre-Frederic Ingold) は時計を製造する機械をつくった。しかし、フランス、イギリスではどうにもならなかった。結局、アメリカに行かねばならなかった。というのは、いうまでもなく、ここでは機械に対する反感が比較的よかつたからであらう。けれど、新大陸は、地広く、人すくなく、古い伝統、とくにギルドの餘弊にわづらわされることもあまりなく、したがって機械に対する反感ははなはしくなかつたとかんがえられよう。いな、人手をばぶく機械は、ここでは、むしろ要望されざえたことであらう。今日アメリカが機械の發達で世界に冠たるを誇る所以を右の事情にのみ求むるは、ゆきすぎであるかも知れぬが、この間に矛盾のないことは留意に値するところなしとしないであらう。

さて、われわれは、以上、フランスにおける機械打ち壊しをみてきたが、それらは、いづれも、あたらしい機械の發明者がいかに迫害を受けたかをものごためたものであつて、機械が産業界に導入せられて、労働者がこれに対して打ち壊し運動をおこしたものとては、かならずしも、充分ではないのではないかともおもわれる。それでは、そういうケースはどうか。もちろん、フランスにもそういうケースはあつたのであらう。論者はよくそう述べてい

る。たとえば、デシエズヌ (Laurent Dechesne) は、機械がイギリスではラダイツ等の事件を発生するにいたらしめたことをいい、それにつづけて、「フランスにおいては、とくに、サン・エチアンヌ (Saint-Etienne)、ボルドー (Bordeaux)、およびパリで、労働者の団体が、機械を設備した工場を襲撃して、すべてを打ち壊わすとおどした」といつている。³³⁾しかし、よくみていくと、機械打ち壊し運動としては、どうも、そのかげがうすくなるようにみえる。すくなくとも、わたくしには、そうおもわれる。なるほど、そこには労働者の暴動、工場襲撃が見られる。すでに暴動であり、工場襲撃である。だから、勢のおもむくところ機械の破壊が生じなかつたとはいえない。しかしながら、それらの事件は、もと、かならずしも機械の打ち壊しを目的としておこつたとはみがたいケースが多いのではないか。もとより、かれらが動くにいたつたのは、生活がおびやかされたからである。生活をおびやかす原因として機械が大きな役割をはたした。そのことにはまちがいはない。しかし、かれらが動く場合、機械打ち壊しをめざしていることが、かならずしも、はつきりそれと指摘することができるほど、うかびあがっているかといえ、どうも、そうはみえないのではないか。すくなくとも、わたくしには、そうはみえない。たとえば、いま引いた、デシエズヌのいうところでも、かれがここで、立論の根拠として指示している、ドレアン (Edouard Dolléans) の「労働運動史」(Histoire de Mouvement Ouvrier)の指定の箇所をみると、なるほど、労働者が一揆をおこして工場を襲う詳細なる記述はある。しかし、この一揆が機械打ち壊しを目的としたものであるということは、かならずしも、はつきりしない。機械を打ち壊したという事実については、なおさらである。いな、それどころではない。なかでも、もっとも詳細な記述とみえる、一八三一年十一月のリヨンの暴動のそれにおいては、労働者は一時リヨン市を占拠したが、この暴動の一つの特質は秩序の維持と生命財産の尊重にあるとの指摘をみる。³⁴⁾

それでは、フランスでは、そのようなケースはみられないのかといえ、かならずしも、そうともいえない。その例証として、わたくしはここに一つの興味ある叙述を引くことができる。それは「あたらしい機械」(Les nouvelles machines)と題するものである。しぎのごとくである。

フランスのもっともゆたかな州の一つに一つの村がある。この村は一七八九年までは住民わづかに三〇〇人あるかないかであった。それが、今日では人口約一、二〇〇人。以前は、土地は、やせ、人は、しごとのもうけがすくなく、緊急不可欠の費用をまかなうことさえおぼつかなかった。わらぶき、土づくりで、たてつきのわるいあばら屋は、わずかに寒暑をしのぐにもたるやたらずであった。現在では、そのおもかげは、もはやみることができない。かわらぶき、石づくり、堅固で風とおしく、しまりのよい、うつくしい家々が、住民の、かねもちではないが、しかしながら、相当安楽であることを示している。地球の同一地点の二の、五〇年ばかり前の状態と今日のすがたの間のこの対照は、その原因をかたるねうちがある。この小さな土地に幸福をもたらすことは、この土地の意に反して行はねばならなかった、ということ、偏見——不幸にもそれは今日フランスの多くの市町村(コムユン)になほ存する——に對する、ながい、はげしい戦をしのばねばならなかった、ということ、を知られたならば、あなたがたは、たいへんにおどろかれるであらう。

わたくしが、あなたがたに、おはなしをしている土地の主たる産業は、いとひきぐるまで木綿糸をつむぐものであった。このしごととは一人一人で行はれ、したがって、のろく、それが女の労働者にもたらす給料は、かの女たちの日用品を買うに足るや足らずであった。かの女たちは、多くはたらいで、得るところはすくなかった。この地方の一人のかねもちが、この地に繁栄をもたらそうとした。しかしながら、かれの最初のころのみは失敗した。かれは、あたらしい紡績機を知っていた。かれは、それを、大きな建物の内にすえつけた。だが、かれがそれを活動させようとしたとき、おそるべき騒擾がおこった。いとくり女たち(citaines)は、じぶんたちのしごと(industrie)の滅亡をみると信じ、集団をなして、紡績工場(Mature)におしかけ

た。「あなたの機械 (Machine) が」と、かの女たちはわめいた。「一日で、わたしたちが一月かかってつむぐより、より以上の糸をつむいで、わたしたちを、どうしようとするのですか。あなたは、わたしたちにパンをくださるのか」。かの女たちの個人的な利益も、一般の利益に応じてみな、まったく、このあたらしい發明から獲られる、綿布の原料がやすくなり、したがって、その消費が大きな割合で増大する、そして、紡績工場はその数を増し、いとくりぐるまの場合よりも、はるかに多くの労働者を雇傭することになる、強情をはって、ききわけがなければ、フランスから生産業の一つをうばうという、憂うべき結果になる、なぜなら、諸外国はその機械をもち、フランスにおいては、もはや製造することのできない安い値で、木綿 (Cottons) を売ることができるから、また、いとくりぐるまは、全然、用がなくなることにさへなるから、そういうことになるであらう、ということ、かの女たちに、わからせようと、こころみられた。だが、だめであった。これらのただしい道理は、ききいれられなかった。あたらしい機械は、みな、打ち壊はされた。

力を使用せねばならなかった。それは村における一つの大きなやみであった。工場主はふたたび機械をすえつけ、労賃を増して、住民にしごとを提供した。それを、かれらは、ながいこと、拒否した。だが、しかし、かれらは、すこしづつ、かれらのあまりにのろい紡車 (spins) をすてることをなっとくした。そして、二年たたぬ中に、機械の導入される前にくらべると、かれらは、よりしごとがふえ、よりゆたかになった。なんとなれば、たくさん紡績工場が附近に建設され、男子、女子、子供、みな、かれらの力に応じて、よい日当をかせいだからである。その上、かれらは、これまで高かった綿布が普通の値段になったので、大変な利益をうけた。³⁶⁾

右の一文は、一八七三年パリで刊行された教科用とおもわれる書物に収められているものである。³⁶⁾ この文の筆者は補償説の立場から、機械の利を説くことを目的としている。だが、それは、いま、問題ではない。問題は、それが、労働者の機械打ち壊しの事例を提供してくれるということにある。ただし、惜しいことに、州の名も、村の名

も明示されていない。そのことは、その資料的価値をそこなう。それは、たしかである。しかし、その事実を否定することにはならないであろう。まさか、ありもしないことを教科用とおもわれる書物にのせもすまいから。そうすれば、われわれは、それにおいて、フランスにおける機械打ち壊しの一の実例をみることできよう。そして、すでに、そうみることがゆるされたとすれば、この国の産業革命の時代に、このようなケースがこのほかになかったとはかんがえにくい。さがせば、まだまだ、出てくるであろう。そうもかんがえられる。そして、そういうかんがえは、今世紀に入つてさへ、かかるケースがみられるとすれば、一層支持されるとみてよいようでもある。そして、それは、実際に、みられるのである。

たとえば、一九〇八年、ルーアン港において、石炭運搬労働者 (les ouvriers charbonniers) が、つぎのごとき要求をかかげて就業を拒否した事実をあげることができ。曰く、「現在ルーアン港において使用されている自動機関 (les engines automatiques) を除去されたい。将来、同様の機関を使用することなきを約束されたい。」結局、使用者は数日前、二隻の船舶に自動荷車 (les bennes automatiques) を用いて行われた労働に対して、腕で行われた場合と同額の労賃を支払わねばならなかった³⁷⁾。

そこには、機械打ち壊しを、みないと、こだわる人にはさらに、つぎの例を示そう。一九〇九年、メリュール (Meur) において、機械の導入から、有名な罷業が発生した。この罷業は暴行にまで発展した。労働者が機械に対していただいた盲目的なげしい憎悪は機械に対する暴行となった。この暴力に直面して、傭主のあるものは、たちまち、労働者の抗議に屈服して、機械を犠牲に供した³⁸⁾。

かくて、われわれは、フランスにおいても、その産業革命の当時、機械打ち壊しが、単なる発明者の迫害にとど

まらず、産業界の事件にまで進んだことをみとめなければならぬであらう。しかしながら、それがいちじるしいものであったということは、にわかに断じがたい。すくなくとも、それはイギリスにおけるほどはげしかったという証左をあげることは、きわめて困難であるようにおもわれる。すくなくとも、わたくしにとっては、そうである。そういうと、あるいは、それは、わたくしの微力のせいだといわれるかもしれない。そういわれると、わたくしとしては、かへすことばがないわけになりそうである。でもわたくしは、わたくしの心の中では、なお、こうつぶやくであらう。「それは、そうではない。なぜといって、それは、イギリスとフランスのつぎのごとき事情の相違の反映にすぎぬと解せられるから。というのは、フランスは農業国である。したがって食料がイギリスよりもよりゆたかであった。また、フランスではイギリスほど機械が普及していなかった。かくて、機械打ち壊しの浪は、フランスにおいてはイギリスにおけるほど、大きく飛沫をあげなかった。」⁴⁾

- (1) D. F. E. Sykes, Ben O'Bill's, The Luddites, p. 31.
- (2) Johann Wolfgang von Goethe, Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Lehrsagen, Drittes Buch, Dreizehntes Capitel. (Goethes sämtliche Werke, 1855, (J. G. Cotta'scher Verlag) Band 19, S. 148.
- (3) Heinrich Heine, Nachlese zum „Romanzero“, Zeitsgedichte, 5., Heines Werke herausgegeben von Ernst Elster, zweiter Band, SS. 298-299.
- (4) Daniel Belllet, La Machine et la Main-d'oeuvre humaine, p. 102.
- (5) Larousse du XIXe Siecle en six volumes, „Papin.“
- (6) E. Levasseur, Histoire des Classes Ouvrières et de L'industrie en France de 1789 à 1870, Paris, 1903, Tome Premier, deuxième edition, p. 414.

(7) Voir 5)

- (8) Daniel Bellet, *ibid.* p. 102.
- (9) Voir 5)
- (10) Voir 5)
- (11) Daniel Bellet, *ibid.* 102.
- (12) Larousse de XX^e Siècle en six volumes, "Jacquard."
- (13) E. Levasseur, *ibid.* pp. 416-417.
- (14) *ibid.*
- (15) Charles R. Gibson, F. R. S. E., *Wonders of modern Manufacture*, London, 1915, pp. 66-67.
- (16) E. Levasseur, *ibid.*, p. 418.
- (17) *ibid.*
- (18) Charles R. Gibson, F. R. S. E. *ibid.* pp. 64-65.
- (19) E. Levasseur, *ibid.*, p. 418.
- (20) Rondelet, *Du spiritualisme en économie politique*, cité par Daniel Bellet, *ibid.*, p. 103
- (21) Daniel Bellet, *ibid.*, pp. 102-103.
- (22) *ibid.*, p. 102.
- (23) Levasseur, *ibid.*, pp. 418-419.
- (24) E. Levasseur, *ibid.*, p. 418.
- (25) Daniel Bellet, *ibid.*, p. 102.
- (26) Larousse de XX^e Siècle en six volumes, "Vaucanson."
- (27) Daniel Bellet, *ibid.* p. 104.
- (28) E. Levasseur, *Comparaison du Travail à la main et du Travail à la machine*, extrait du *Bulletins de Febrier et Mars 1900*, p. 3.

(83) le cope は、cope は他動詞、le はその目的格と解すべきがごとし、そして、cope の意義不明、但し、訳出のことを意味と解する外なきやうおもはるるがいかによ、なほ、この訳にあたりては同僚菱山泉氏の御懇篤な指示を仰ぐを得た。cope の右の解釈も亦同じ。記して深謝の意を表する。

(84) voir 28), Daniel Bellet, *ibid.*, p. 104.

(85) Daniel Bellet, *ibid.*, pp. 103-104.

(86) Larousse de XX^e Siècle en six volumes, “Réveillons.”

(87) Laurent Dechesne, *L'Expérience Histoire de l'Economie Dirigée ou l'Homme à la Conquête de la Liberté*, Paris, 1938, p. 154.

(88) Edouard Dolléans, *Histoire du Mouvement Ouvrier, 1830-1871*, Paris, 1936, p. 66.

(89) Th. Lebrum. *Livre de Lecture Courante contenant la Plupart des Notions Utiles qui sont à la portée des enfants de 8 à 12 ans*, Paris, 1873, *Seconde Partie*, pp. 78-81.

(90) *ibid.*

(91) Daniel Bellet, *ibid.*, p. 110.

(92) *ibid.*

(93) Laurent Dechesne, *Histoire économique coterporaine*, Paris, 1936, p. 24. “Nous somme, écrivaient en 1828 Chaptal, loin encore d'avoir en France cette profusion de machines qu'on voit en Angleterre.” Voir Levasseur, *ibid.*, p. 419.